

東アジアの近代をとらえる新しい視角

中村 聡



A5判 418頁
研文出版
[本体 7500円+税]

川邊雄大著
東本願寺中国布教の研究

中国や日本といった東アジアの近代化研究に関しての著作は多いが、研究らしい研究とはいえば、質・量ともに乏しいのが現実である。これに関する各学会の研究者とその論文の数をみてみれば一目瞭然である。近世以前あるいは大きく時代を飛んで現代の研究が盛んであるのに対し、近代期の研究はきわめて少ない。ましてや、近代への移行期を丹念に研究した著作となると、研究者も限られ、その研究分野も指を折って数えられるほどである。それに反して、この分野の一般書は数多く出版され、書店にもこの類の本が山と積まれている。

何故だろうか。古典研究と異なり、未だにその息吹が感じられる近代はなんとなく分かっているようで、その実は正確な研究がなされていないというのが事実であろう。また時代が近いだけに、口伝や風聞といったことが実しやかに語られ、

一般の人々にとつては、どう考えてもこちらの方がおもしろいに違いない。その点から言えば、本書は一般的な近代物の面白みからは程遠い、実に精密な事実の積み重ねから近代を描き出した一書である。

従来の近代日中関係文化交流史研究では、実藤惠秀氏に代表されるように、清国公使館員や清国留学生等に関する研究が大勢を占めていた。また近代日中関係史においては、政治、軍事といった分野を中心とした研究が行われてきた。さらに、そこに取り上げられる人物は政治家、外交官、軍人、またいわゆる大陸浪人などであって、言うなれば国策に貢献した人物が中心であったと言つてよいであろう。本書のように、政治史、文化史の表面に目立って現れてこない宗教関係者を研究のターゲットとして扱った近代史にはついで出会っていない

い。一步譲って、近代における日本の仏教の布教史という側面から捉えてみても、浄土真宗の布教の広がり、日本の中国侵略と深く結びついていたというような、宗教に政治色を絡めたような扱いであって、純然たる布教活動の実態や制度に光を当てていくというものではなかった。さらに加えるならば、幕末維新といった近代における浄土真宗に絞って見ると、当時の政治家や権力者と通じ合っていたと考えられる西本願寺派の研究が主となっており、東本願寺の僧侶がいかにして近代に活躍したのかは、多少はその方面に興味を持つている者でも容易に窺い知ることができない分野である。そういった面で、本書を読むに至って、初めて出くわす近代の諸事実に驚くばかりであった。

内容は大きく二部構成となっているが、あまり例を見ないほどの序論がその前段階に設定されている。ここで、松本白華、北方心泉という二人の僧侶の経歴と、各分野の研究史（上海の歴史、布教史、文化交流史、書道史、漢学史等）が語られていく。後の二部に続くイントロダクションとしては非常に重厚で著者の研究方向を如実に語る部分である。

第一部は、東本願寺が海外布教を開始する以前、すなわち幕末明治維新期に東本願寺が置かれた状況を明らかにしている。注目すべき点としては、幕末期に多数の浄土真宗僧侶が

大分県日田の咸宜園で学んでいたという事実である。著者はこの点に注目し、その学統である松本白華を通して東本願寺と明治新政府がどのようにして関係を構築していったのかについて詳しく論じている。自ら何回も咸宜園やその周辺に足を運び、咸宜園教育センターの研究者との学問的交流を持った著者だからこそその考察であり、咸宜園という江戸時代の教育センターの実態把握という側面からも、後の研究の基盤となる内容を持っている。さらに白華たち東本願寺僧侶一行による海外視察の有り様を渡航前、渡航中、渡航後に分けて分析し、この視察から彼らがいかなる刺激を受け、今後の方針を立てていったのかが明確に理解できるようになっている。

在外別院開設の経緯、当時の上海やその中に在ったの別院の状況、さらには日清戦争後の中国布教の再開について語られているが、当時の上海社会の状況分析は著者の得意とする研究分野であり、他の追隨を許さぬ緻密な考察が述べられている。この部分だけでも上海近代史として成立するほどの研究成果と言つてよいだろう。事実、著者は上海近代史に関する国際学会において数々の発表を行い、中国の研究者とも交流を持ちながら、この分野の研究をリードする存在として活躍している。

第二部は「東本願寺僧侶の日中文化交流」と名づけられて

いるが、ここにも著者の得意とする当時の上海の社会、文化状況が散りばめられ、そこに日本の布教僧が飛び込んで活動していく様子が鮮やかに活写されていく。幕末から明治維新期における邦人の上海進出とその著作については、『滬游雜記』と『上海繁盛記』を取り上げているが、この時期に中国で出版された書籍が幕末から明治初期に日本に伝わり、その情報の重要さに目をつけた日本人が和刻本を作成していく様子が丁寧に説かれている。中国にとっても、日本にとっても近代国家に生まれ変わろうとするこの時期、じつは多種の書籍が中国から日本へ、主に長崎経由で舶載された。その中には著者が取り上げたような中国都市の社会状況を伝えるものがあったり、南京条約以後に中国に住み着いた在華欧米宣教師が中国語で書いたプロテストメントの布教書があったり、ま

た西洋の近代科学を紹介した漢訳西洋科学書などがあった。これらの書籍輸入は、それ以後は逆に日本に伝わった西洋近代の情報が中国へと舶載されていったことを考えると、中国から日本へとというアジア的文化の流れの最後期と言ってもよいのではないだろうか。しかし、未だ歴史分野でも哲学、文学分野でもこの時期の文献を対象とした研究は殆ど無いといっても過言ではない。その意味でも、この部分の著者の研究は重要である。

さて上海へと渡った白華や心泉は、清末の文人、杭州の文人たちと交流を持つようになり、さらには上海に在住している日本人画家たちとの交流を持つようになったようである。今までの研究とは異なり、民間の僧侶と現地の文化人の交流を取り上げたところに、著者の近代アジアを見る視点がはつ

岩波新漢語辞典

第二版

山口明穂・竹田 晃 編

日本語のための漢字の辞典、
充実の最新版

〈内容要内進呈〉

常用漢字表の改定を反映し、人名、地名に用いる国字もさらに充実。故事成語の説明も豊富で学習にも最適。B6新判上製函入 本体3000円

仏典は

四六判 本体3000円

どう漢訳されたのか

船山 徹

——ストウが経典になるとき
インドに誕生した仏典は、どう原語から訳され、漢字文化圏に入ったのか？ 玄奘や鳩摩羅什らの翻訳理論とは？ 壮大な漢訳史の概説書。



岩波書店

(定価は表示価格+税)

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
<http://www.iwanami.co.jp/>

きりと見て取れる。そこに、歴史は社会の上層部だけで作られているのではなく、社会の中のそれぞれのポジションで活動した人々の重層的な活躍がそれを作り上げているのだという、著者の意見を汲み取るべきであろう。

最終章は主に帰国してからの心泉の活動が、書の受容を中心としてまとめられていく。彼は異邦で学んだ書に磨きをかけるべく、三宅真軒に教えを請い、独自の書風を築いていた。日本人が容易に渡航できる状況でなかった上海に渡り、現地の生活の中で中国文化に触れ、各地の文人との交流を通じて、日本ではほとんど流通していない小学、金石類の漢籍を学んだ。さらに物事に拘泥しない心泉の性格と自由な立場が心泉独自の書風を作っていた。また心泉は書だけでなく、その中国での長い生活を通して、中国の文化や生活様式までも含めた中国文化を総合的に摂取していった。中国に対する憧憬の念を生涯持ちつつ、布教を通じた中国における活動に最後まで意欲を持ち続けたのである。

白華や心泉を始めとする布教僧の日記、各種の清末文化人たちの交流、彼らが収集した書画といった資料が残されているものの、今まではほとんど研究の手が及んでいないという状況であった。しかし、本書の上梓によってこれらの資料の多くが日の目を見ることができたのではないだろうか。そ

して、それらが逆にその後の渡清僧たちに与えた影響も知り得ることができるようになった。著者が近代を研究するに当たって詳細な文献調査と徹底した現地調査を行われたことは、近代を扱うものとしては当然の研究姿勢ではあるが、ここまで徹底した例はあまり類を見ない。それこそが著者の研究スタイルなのだろう。学問を同じくする者としては、深く反省するとともに、改めて勉強させてもらう機会を得たことに感謝したい。

(なかむら・さとし 玉川大学)